

6月23日付の奈良新聞に掲載された、ソフトボール「国体選手の選考会」と合同練習会の記事を見て、40年前のわかくさ国体を思い出した。

1964年10月、わかくさ国体秋季大会開会の直前に、県国体本部に一通の手紙が届けられた。差出人は匿名の高知県人、封筒の中には高知新聞の切り抜きと、一枚の便せんが高知県人を代表しての申すと記した、奈良国体への怒りを込めた文章であった。

高知新聞記事のタイトルは「奈良国体」。要約すれば「間もなく始まる国体の総合優勝

わかくさ国体小話

ソフトボールの総合優勝

は奈良が取るだろう。開催は過去すべてが優勝している。なぜ勝てるのか。ソフトボール王国高知勢が、奈良国体の組み合わせで、強豪ひしめくゾーンに入れられ抽選とは言え、これほど偏った形

更に厳しい言葉がつづられていた。ソフトボール競技は少年男女・成年男女の四種別で競われ、その成績の結果が総合されて種目の総合成績となる。今回は高知県と奈良県が得点で並び総合

ファイの引き継ぎについての連絡が県体育協会に届いた。高知県では知事を筆頭に、県体育協会関係者が、盛大にトロフィー引き継ぎのセレモニーを計画しているの、それにふさわしい人の派遣をし

高知県民の熱意を知る

は意図的ではないか」と、不公平を主張しているのである。

優勝を分け合った。どちらも国体初優勝、受け取った一つのトロフィーは、前半期が奈良で、後半期は高知県が保管することになった。

てほしいとの要望であった。熱狂的な雰囲気から覚めていた本県では、トロフィーの引き継ぎは軽く考えていたが、高知県の熱意に押されて人選を話し合った。

当時の県ソフトボール連盟会長で、県会副議

明かす闘志で闘ってこい」と書かれた励ましの記事内容。投書の文面には新聞記事を盾に、

わかくさ国体が終わって半年たった翌年の4月、高知県からトロ

長だった榎信晴氏と、県体育協会専務理事(県教委保健体育課長)の私が同行することを伝えて、高知県の賛同を得た。65年4月17日、高知県庁において、知事をはじめ多数の体育関係者が集い、報道陣が取り囲んで厳粛な引き継ぎが執り行われた。

式典が終わって祝賀の接待を受けたが、「飛行機の予約時間があるの」とお断りして会場を出た。盛大な優勝トロフィーの引き継ぎ行事に参加し、改めて大会前に読んだ投書が、高知県民のソフトボールに懸ける熱意の深さ、強さを知るところとなり、高知県が総合優勝を遂げたことは本当に良かったことかから思った。が、なぜか晴れやかな気持ちになれなかった。

なれなかった。あれから40年、たくさん残っている。第2、4土曜日掲載

ズが、ひと際輝いて見えたことを今も脳裏に残っている。第2、4土曜日掲載



今年の国体代表選考会を兼ねた合同練習会が5月28日、天理大学体育学部西グラウンドで行われた。練習会は全4回の予定でこの日が3回目。出場枠を懸け、8月の近畿地区予選に挑む。